

ランの花

みちのくの旅

安藤 軍治

みちのくの春の花

“ちいさん・ばあさん・なにしてござる” “ちいさん・ばあさん・なにしてござる”。

こんな歌をうたいながら、ちびばとと呼ばれる蘭の花のつぼみを、一枚一枚めくって行く。

春雪もすっかりとけて、綿入れの着物が重くなる頃、村童たちは、裏山にのぼり、陽だまりの草に寝ころんで、こんな遊びをしながら春を迎えるのである。

らっぱ水仙のつぼみを小さくしたような、この蘭のつぼみを一枚一枚開いた萼の中から、やがて、うす紅色の斑点が、丁度“べに鹿の子百合”の花片のような雌蕊が、男のシンボルそっくりの雄蕊をしっかりとだきしめるようにしてあらわれると、“ちいさん、ばあさん寝てござる、うわあ！”とかん声をあげてころげまわるのである。一日一日と陽ながになる頃の、みちのくの野山には、今もなお、かすかすの野草や山草が咲き乱れていることに変わりがない。4月の末から、5月のはじめ頃にかけて、東北本線で白河を過ぎ、福島にとりかかる頃から、車窓は、桃・梨・さくらんぼ・りんごなど、文字通り、りょう乱の果樹園の花に取りかこまれ、青い麦、黄色い菜の花が盛りあがって、国道4号線の福島・白石間などは、まるで、夢の国のようになる。

昔、松尾芭蕉という人が、みちのくを旅して、美事なつづり方、“奥の細道”を書き残してくれた。それは今日東北を旅する人々、東北を旅しようとする人々に“みちのく”の感を、みちのくのさびしい魅力を深く植えつけてくれる。そして“みちのく”の山河は、今も、なお“奥の細道”のおもかげを、いたるところに残してはいるけれども。

その昔、農家の軒先や、畑のすみっこなどに、ポツリポツリと咲いていたであろう野桃や山梨も、いまや多角経営の農家の産業として、見事に舗装された国道沿線をおおいつくしているのである。南部（岩手・青森）や津軽（青森）、鹿角（秋田）などの、丘も台地も、すべてうすべに色をぼかした、林檎の花一色につつまれる風情は、みちのくの晩春・初夏を旅する人々にとって、心あたたまる景観の一つであろう。

夏まつり

みちのくの旅の魅力の一つとして、忘れられないものに、民謡・郷土芸能・お祭り行事などがあげられる。

政治や経済の中心から、やや置き去りにされたうらみが、東北にはあったといわれる。そのことが、かえって東北の民俗や行事のなかに、多くの昔ながらの面影を残したえたのであろう。一面また、長いきびしい冬の寒さに痛めつけられ、冷害や、雪害になやまされがちな農村や漁村の人達の中に、数々の興味深い、香り高い“おまつり”や行事が唯一のたのしみとして、残されたのかも知れない。

相馬（福島）の野馬追い、岩手のチャグチャグ馬子、横手（秋田）のかまくら、塩釜の港祭りなど、数多いものの中から、私共は、青森のねぶた、秋田の竿頭、仙台の七夕祭りを、かりに、みちのくの三大夏祭りなどと呼んで、これらの代表的な行事の数々を末長く残したいとの念願をも含めて、地域外の観光客にも呼びかけて見た。ただこれらのお祭りや行事は、いずれも宗教とのつながりが強く、農村の繁忙季との関連もあって、その実施期日が重なり合い、三つの祭りを一度に沢山の人に見て貰うためには、宿舎の収容能力などの都合もあってむずかしいので、どちらかを変更または、引きのばしの呼びかけもして見たが、強い抵抗が解けないため、期間中せいぜい数本の臨時列車を東京方面からお迎えするにすぎないのは残念なことである。

夏の夜、数十人の老若男女が一团となって、大きな台車の上につらえられた武者人形の大張り子などを囲んで“ラッセラーラッセラーラッセ・ラッセ・ラッセラー”と“幾組も幾組も街中をねり歩く、ねぶた祭など、まさに東北夏祭りの圧巻である。

ラインと呼ばれるもの…ゴジラ部隊の成果

東北地方には、その真ん中を、南から北に貫く脊梁山脈が走り、日本海側と太平洋側とを二つに分けている。この山脈と、日本海側の鳥海火山脈、太平洋側の北上山脈等を含めた中に、1500m以上の山や山群が、二十ばかりあるのであるが、東北の観光魅力である原始林や、原始林に囲まれた湖沼や、峡谷や、温泉などの多くは、これら山岳地帯の中に温存されている。

中部山岳地帯、いわゆる日本アルプス地域内の山々などにくらべると、東北の山々は低くかつ、おだやかな稜線、つまりスカイラインをつらねているのである。

これらの低くて頂上までの登行にも割合簡単なはずの山々、そしてそのために、いわゆる若い元気な人々と

って、登山としての魅力は比較的乏しいのにもかかわらず、素晴らしい原始林のすがたや、見事な高山植物の咲き乱れる草原や、さして危険でもない岩場などを持つこれらの山々も、鉄道線路や国道線からのアプローチが長くかつ細かったために、その頂上付近または山腹にある数々の魅力を大衆に観賞して貰う機会にめぐまれず、一部の青年や、わらんちに身をかためた信仰の人々によってのみ独占されがちであったのである。

ここに、雄々しくも、たくましくもいどみかかったのがゴジラ部隊である。

磐梯や吾妻や蔵王の尾根尾根は、数々の新兵器をようするこの勇敢なるゴジラ部隊によって踏みくだかれ、発破の轟音は谷々をゆるがし、熊や野猿の群れを驚ろかしながら、みちのくの山々を変容してしまった。

数十メートルの物のすごい大首を振り上げ振り下ろし、火をふくように、カッと開いた大口に、みちのくの山々を食い荒したゴジラが、ブルドーザによって岩山を踏みならし、クラッシャーやミキサの快音にほどよく地ならしをしながら、静かに転進したあとには、まことに見ごとな、いわゆるラインと呼ばれる観光道路が、尾根を結び、谷を渡して、みちのくに新しい観光ルートを作って行ったのである。みちのくの観光図に最初に画かれたいわゆるラインは、八甲田・奥入瀬・十和田湖をむすぶものであり、東北の新しい観光路線は実に一番北の奥から始められたのであるが、その後相ついで進攻したゴジラ部隊すなわち、道路公団・自衛隊等と呼ばれる親愛なる兵団の活躍によって、磐梯吾妻道路、蔵王道路、吾妻スカイバレー、男鹿・八幡平スカイライン等々が、つぎつぎに開設され、さらに岩手と秋田県境や、岩手・山形を結ぶ横断産業道路が完成されるにおよんで、いまや東北はライン天国を迎えた観がある。

ゴジラ部隊は、みちのくの山々を踏みくだいてなお足らずとして、随所に溪流をせきとめて湖をつくり、はなはだしいのは国鉄の駅を三つも水底にうづめて（秋田・岩手）雄大な人造湖を造った。そこには電源が開発され、東北の人々を水害の悪夢から守りながら、さらにいくつかの新しい香り豊かな東北の観光ルートを形成して行ったのである。ゴジラの荒々しい爪あとも、やがて新しい緑の草におおわれ、多くの人工的施設の整備と相まって国際的観光の場として脚光を浴びる日も近いであろう。

オフビートン・トラックと呼ばれて、わずかに欧米の人々に親しまれかけて来た東北の観光ルートは、まず、ゴジラ部隊によって、ビートトラックとして国際観光の舞台に登場しつつあるのである。

雪のみちのく

“花の山形・紅葉の天童・雪をながむる尾花沢”。これ

は山形の民謡花笠音頭の一節である。

一年の半分を、雪の中でくらすみちのくの人々にとって、春の花、秋の紅葉と同じように、雪かまた、昔から、昔の人々の間にも、忘れることのできない“物のあわれ”であり、当世風にいえば、雪こそが、偉大なる“観光魅力”であったのである。

数年前の正月、私は秋田県の発荷峠から十和田の湖畔をたどり、奥入瀬の溪流に沿って青森県の焼山まで、スキーで歩いて見たことがある。新緑の十和田、紅葉の奥入瀬の名は余りにも多くの人々になじみ深いものであるが、雪の十和田、冬の奥入瀬の景観もまた、なかなかすてがたいものである。

そして樹水の蔵王・吾妻・八幡平・八甲田の樹水、これこそは、東北の山だけが持っている冬の観光魅力である。

かつては自然の力にあきらかに似た気持で、炬燵や、いろりや、温泉と一緒に、雪見にやすらぎを求めていた人々。今や雪を待ちかねて、スキーを楽しむ若人たち。それに加えて、今までは、写真や、映画などによってのみ、大部分の人達の観光対照であった東北の樹水が、この偉大なる冬の東北の魅力が、今やゴジラ部隊の努力によって、スキーもアイゼンも要らずに観賞することができるようになったのである。

酒・さかな・風俗

“まつしぐ・おどってたんせ、そんなでがんす”岩手の山奥に新しくゴルフコースができた。クラブハウスにも、こんこんと湧き出る温泉をひいてあるこのコースを訪ねた人に、昔ながらの、ほほかぶりの、御所村のあねこはこうおしえてくれた。赤いシャツなどを平気で着こんでやって来るお客様に、とまどいながら、“あいや、ほになじよすべ、おらすらね”と嘆じていることであろうか。

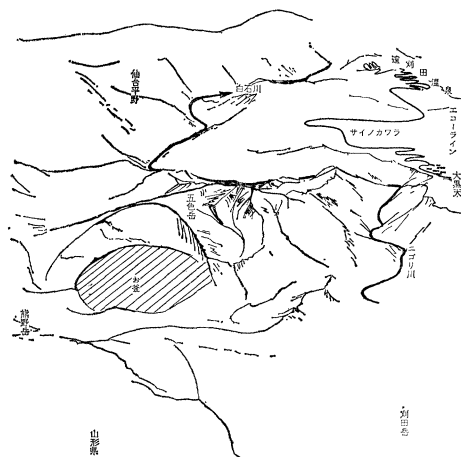
“ハンコタンナ”と呼ばれる、庄内おばこの服装や、細いたづつけまたはももひきのような、紺のはかまの腰のところに、もえるような、真紅な下着をチラホラさせて、山道を帰る“しずく石あねこ”などの姿もまた、みちのくを旅行く人々にとって、風情を感ずるであろうし、東北特有の山菜料理や、ウニ・ホヤ・ナマコなどとよばれる、三陸海岸の“さかな”を、豊じゅんなみちのくの酒とともにたのしむもよかろうし、昔ながらの湯治場にひたりながら老農たちのうたう、民謡をたのしむのもまたよかろう。学会の勉強におつかれであろうゴジラ部隊の先生方に、なお数日の暇をつくられて、近代化された東北の新観光地や、昔ながらのみちのくの風情を訪ねられることを、切におすすめる次第である。

（筆者：日本交通公社東北支社長）

蔵王エコーライン

(口絵写真説明)

奥羽山脈に位置する蔵王連峰は、宮城県と山形県との県境にあって、みちのくを奥州と羽州とにわかっている。主峰である熊野岳(1841m)と刈田岳(1759m)、五色岳(1674m)の間には、蔵王の神秘を湛えた紐碧の「お釜」といわれる火口湖があり、頂上からの太平洋や奥羽の山々を、ほしいままにする大観は、四季を通じて実にすばらしく、これら山のあらゆる魅力を持つ蔵王に、昭和37年「エコーライン」(有料山岳道路、26049m)が完成し、白く平らなドライブウェイは、観光開発に大いに力を発揮している。



東北六県の面積・人口・経済の比較

東北地方は南北約535km、東西約200kmで南北に細長く面積は約66887km²で、人口は9251048人(昭和

38年10月1日)で全国のほぼ1/10をしめているが、前年に比較するとやや減少している。昭和39年版朝日年鑑によると東北各県の面積・人口・経済状態は下記のとおりである(人口は38年10月1日)。

	面積(km ²)	人口(人)	38年度決算(円)		38年度当初予算(円)	38年度交付金(円)
			歳入	歳出		
青森県	9612.65	1430758	255億2392万	249億2183万	253億3168万	99億7603万
岩手県	15274.46	1445526	281億1477万5548	276億3489万5527	282億277万4600	117億1248万5000
宮城県	7286.41	1738378	295億6627万9124	287億824万635	274億2548万4000	93億
秋田県	11608.97	1354765	263億7419万	259億1224万	250億2753万	107億7943万
山形県	9325.15	1272241	240億8900万	238億8800万	245億2000万	97億5100万
福島県	13779.82	2009380	383億3640万3982	378億8440万4341	369億9510万6000	132億4058万7000

特集号編集をおわって

5月に総会および年次学術講演会が東北で開かれる機会に、学会誌の東北特集号を出してはとの編集委員会からのお話があり、当支部としては、この機会に東北というところを多くの会員に知っていただき、5月に来仙される方々の手引きにでもしたいと考えて、東北開発の問題点についてまとめてみた。東北開発のおくれが、いづこにあるかを明確にすることはできなかったが、東北の開発の現状につき、多くの会員に知っていただくために、本特集がいささかでも参考になることがあれば、当委員会としても望外の喜びである。終りに、本特集号の原稿作製に際して、各方面から多くの資料の提供につ

いてご協力を受けた。いちいち、その引用を示すことができなかったことをお断りして、深く謝意を表する次第である。

なお編集委員はつぎのとおりである。

委員長	樋浦大三(東北大学)
委員	阿部泰夫(東北大学)
	梅津清七(国鉄)
	小野寺駿一(第二港建)
	金子晃(東北地建)
	塩釜知賀磨(東北農政局)
	丹野哲郎(宮城県)
	南雲明(東北電力)
	松本順一郎(東北大学)
	三浦晃(東北大学)

(五十音順)